2011．9．5

第８０回アブダクション研究会開催のご案内

アブダクション研究会

世話人　福　永　征　夫
TEL ＆ FAX　0774-65-5382
E-mail：jrfdf117@ybb.ne.jp

事務局　岩　下　幸　功
TEL＆FAX　042-356-3810
E-mail：yiwashita@syncreate.jp

第８０回アブダクション研究会の開催について、下記の通りご案内を申し上げます。

（1）第７９回アブダクション研究会のご報告をします

１１・７・３０（土）に開催致しました前回の第７９回アブダクション研究会は、花村　嘉英　氏（中国・集美大学）に『 エドワード･サピアの言語学とアブダクション 』というテーマでご発表をいただきました。

アメリカの天才的言語学者と称された、エドワード・サピア（1884～1939）の言語学の世界と、日本との関係が深く、中国近代文学の創始者と目される、魯迅（1881～1936）の「阿Ｑ正伝」の文学世界を結び付けようとする、野心的な構想に基づいて、人間の言語習慣と人間の思考様式の関連性に迫らんと試みる、眞に興味深く有意義なお話を伺いました。

この日に合わせて中国の職場からお帰りをいただき、私達の言語を巡る新たな研鑽のために、重要な切っ掛けと機会を与えていただきました、花村先生に心から感謝を申し上げ、積極的なご参画をいただきましたご出席の皆様に心よりお礼を申し上げます。

なお、花村先生には、『エドワード・サピアの言語学と阿Ｑ正伝の世界 』という題目の論稿をお取りまとめいただくように、お願いを致しております。それが出来上がり次第、本案内状を差し替える形で、皆様にお届けしますので、何卒大いにご期待ください。

エドワード・サピア著＝安藤貞雄訳『言語』（98・岩波文庫）は、「アメリカの天才的言語学者サピアが、天馬空を行くような想像力と透徹した洞察力をもって、言語の特質、言語と思考の関係、言語の要素、言語の音声、文法的過程、文法的概念、言語の類型、言語変化、音法則など、言語学の諸問題を原理的に考察し、さらに言語と人種・文化・文学とのかかわりに説き及んだ言語学入門」（表紙案内文）だとされています。

世話人は、この機会を得て、サピアの言語学の新鮮さと、関わりの広さ、含蓄の深さ、に驚き、感銘を受けながら、新たな研鑽をさせていただいています。

この著作に一貫しているのは、サピアが、言語の変化のプロセスを本質的に解明せんと取り組んで、類稀なる洞察を展開して、方向性を探究している点であります。
そこで、世話人は、『言語の偏流（DRIFT）』という視座から、著作の要点を抜粋して、要約することを試みました。
それを、以下に再録致しますので、皆様には、どの知識分野の方も、何卒、繰り返してお読み込みをいただいて、この絶好の機会を逃さずに、ご研鑽のステップを進められますよう、心よりご期待を申し上げます。

==========

言　語　の　偏　流［DRIFT］

◆言語の普遍性◆

［１］言語に関する一般的な事実としては、その、普遍性ほど顕著なものはない

●言語に関する一般的な事実としては、その、普遍性ほど顕著なものはない。　・・・十分に発達した言語をもたない民族のことなど、われわれは聞いたことがない。アフリカ南部の、発達程度のもっとも低いブシュマン族の人間も、教養あるフランス人のことばに本質において完全に比肩できるほど豊かな記号体系にもとづく形式で話しているのである。言うまでもないが、未開人の言語では、比較的抽象的な概念はそう多量には見いだされないし、より高度の文化を反映する豊富な専門語やニュアンスのより細かい定義もない。
・・・言語の根本的な土台――明快な音声体系の発達、言語要素と概念の明確な結びつき、あらゆる種類の関係を形式的に表現するための精緻な用意――これらはすべて、既知のどの言語を見ても、厳密に完成され、体系化されているのである。・・・

［２］深い感銘をあたえるのは、ことばの、ほとんど信じがたいほどの多様性である

●ことばの普遍性とほぼ同様に深い感銘をあたえるのは、ことばの、ほとんど信じがたいほどの多様性である。・・・英語式とラテン語式のあいだの形式上の不一致などは、もっと異国風の言語パタンについてわれわれが知っていることと比べるならば、比較的微々たるものである。・・・

◆音声パタン◆

［３］客観的な音声体系の背後に、もっと制約された「内的な」「理念的な」体系が存在する

●・・・ある言語に特有で、綿密な音声学的分析によってはじめて得られる純粋に客観的な音声体系の背後に、もっと制約された「内的な」、あるいは「理念的な」体系が存在する、ということだ。この内的な体系は、素朴な話し手にとっては、おそらく［客観的な体系と］同様に、体系としては意識されないだろうが、完成したパタン、心理的なしくみとしては、客観的な体系よりもはるかに容易にかれの意識にのぼりうるのである。
・・・内的の音声体系は、音の内容が変化したずっとあとまでも、音声要素の数、関係、機能を包含するパタンとして存続することがある。歴史的に同族関係のある二つの言語や方言が、一音も共有していなくても、両者の理念的な音声体系は、同一のパタンであることもある。

［４］音声構造と概念構造は、ともに、言語が形式を指向する本能的感情を示している

●わたしは、このパタンが変化しない、とほのめかすつもりは毛頭ない。その機能上の様相は、縮小したり、拡大したり、変化するかもしれない。しかし、その変化の速度は、音そのものの変化の速度よりも、はるかに遅いのである。したがって、すべての言語は、明確な文法構造によって特徴づけられると同様に、その理念的な音声体系と、根底にある音声パタン（記号的原子の体系と呼んでもよい）によっても特徴づけられることになる。音声構造と概念構造は、ともに、言語が形式を指向する本能的感情を示しているのである。

◆名詞と動詞◆

［５］ことばの命題では主題と叙述の区別が根本的に重要である

●・・・ことばが一連の命題から成り立っていることを想起するとよい。何か話題にするべき事柄がなければ

ならないし、ひとたび、談話の主題が選ばれれば、それについて何事かを叙述しなければならない。この区別［主題と叙述］は根本的に重要なことなので、大多数の言語は、この命題の二つの項のあいだにある種の形式的な障壁を設けて、この区別を強調してきた。

［６］談話の主題は、人間か、事物であるから、名詞がこの種の具体的な概念のまわりに集まる

●談話の主題は名詞である。もっともありふれた談話の主題は、人間であるか、事物であるから、名詞がこの種の具体的な概念のまわりに集まる。

［７］叙述は存在の瞬間から瞬間への移行の活動なので、動詞が活動の概念のまわりに集まる

●ある主題について叙述される事柄は、通例、最広義の活動、すなわち、存在の一瞬間から他の瞬間への移行であるから、叙述の任務のために取っておかれた形式、すなわち動詞が、活動の概念のまわりに集まる。
名詞と動詞の区別がまったくできないような言語は、一つも存在しない。

［８］名詞と動詞の区別がまったくできないような言語は、一つも存在しない

●名詞と動詞の区別がまったくできないような言語は、一つも存在しない（もっとも、特定の場合には、この区別の性質がわかりにくいものもある）。その他の品詞については、事情が異なる。他の品詞で言語の生命にとって絶対に必要とされるものは、一つとして存在しない。

◆言語の分類の可能性◆

［９］地球の何千という言語や方言の特異性を説明できる分類は困難だが無用だとは思わない

●厳密に言えば、地球の表面で話されている、何千という言語や方言の特異性をあますところなく説明できるような、少数の類型を提示することが不可能なことは、端（はな）からわかっている。・・・分類はこのように困難であるが、だからこの仕事は無用だ、ということになるだろうか。わたしは、そうは思わない。

［10］諸言語も、異なる道程をたどりながら結果的には相似した形式に収束する傾向があった

●建設的な思索という重荷をおっぽり出して、各言語は独自の歴史をもち、したがって、独自の構造をもっている、という立場をとるのは、あまりにも安易だろう。そのような立場は、半面の真理しか表していない。世界のさまざまな地方で、それぞれ異なる歴史的な先例から、相似した社会的・経済的・宗教的な制度が発達してきているのとまったく同様に、諸言語も、異なる道程をたどりながらも、結果的には相似した形式に収束する傾向があったのだ。

［11］言語は徐々に整合的に変化するのであり、無意識的にある類型から別の類型に移っていく

●のみならず、言語の歴史的研究が疑う余地のないまでに立証したように、言語は徐々に変化するばかりでなく、整合的に変化するのであり、無意識的にある類型から別の類型に移っていく。

［12］類縁関係のない諸言語がほぼ相似した形態に、独立にしばしば到達したのにちがいない

●しかも、類似の傾向は、地球上の遠く隔たった地方でも観察されるのである。このことからの帰結は、類縁関係のない諸言語が、ほぼ相似した形態に、独立に、しかもしばしば、到達したのにちがいない、ということだ。

［13］歴史の背後に強力な偏流があって、言語をバランスのとれたパタン、類型へおもむかせる

●したがって、似通った類型の存在を想定する場合も、あらゆる歴史的過程の個別性を否定しているのではない。ただ、歴史の表面の背後に強力な偏流があって、他の社会的な所産と同様に、言語をバランスのとれたパタンへ、つまり、類型へおもむかせるのだ、と主張しているにすぎない。

［14］類型は存在しているし言語の生命のいくつかの過程が類型を変更しがちである
●われわれは、言語学者として、このような類型は存在しているし、言語の生命中のいくつかの過程が、その類型を変更しがちであることを、十分に理解することで満足するだろう。

［15］なぜ相似した類型が形成されるのか、類型を造っては消滅させる力はどのような性質か
●いったい、なぜ、相似した類型が形成されるのか、こういう類型を造っては、また消滅させる力は、いったい、どのような性質のものであるか――こういう質問は、尋ねるのはやさしいが、答えるのはむずかしい。あるいは、未来の心理学者たちは、言語の類型が形成される究極の理由を、われわれに明かすことができるかもしれない。

◆総合の程度による分類法◆

［16］分析的言語とは複数の概念を結合して単一の語にすることをしない言語のことである
●分析的言語とは、複数の概念を結合して単一の語にすることをまったくしない言語（中国語）、あるいは、節約しながらそうする言語（英語、フランス語）のことである。分析的言語では、文がつねに最重要であって、語は二次的な興味しかない。

［17］英語は傾向として分析的であるにすぎなくフランス語と比べてまだ相当に総合的である
●しかし、英語は傾向として分析的であるにすぎない。フランス語と比べると、まだ相当に総合的である。少なくとも、いくつかの面ではそうである。

［18］総合的言語では、概念がもっと濃密にむらがり、語はもっと豊富な内容をもっている
●総合的言語（ラテン語、アラビア語、フィンランド語）では、概念がもっと濃密にむらがり、語はもっと豊富な内容をもっているが、しかし、概して、単一の語の具体的な意義の射程を適度な範囲に保とうとする傾向がある。

［19］多総合的言語は、普通以上に総合的な言語のことで、語が極端に念入りに作られている
●多総合的言語は、その名の暗示するとおり、普通以上に総合的な言語のことである。語が念入りに作られていることは、極端と言ってよい。われわれなら従属的に取り扱おうとは夢にも思わないような概念が、派生接辞や語幹要素の「象徴的」変化によって記号化される一方、もっと抽象的な観念も（統語関係を含めて）、また語によって表されていることがある。

［20］この三つの用語は、絶対的な付箋としてよりも、ある偏流を定義するのに有用である
●この三つの用語は、純粋に量的である――また相対的でもある。すなわち、個別言語は、ある観点からすれば「分析的」であり、別の観点からすれば「総合的」でもある、ということだ。これらの用語は、絶対的な付箋としてよりも、むしろ、ある偏流を定義するのに有用である、とわたしは信じている。ある言語が、その歴史の流れのなかで、ますます分析的になってきているとか、単純な分析的基盤から高度に総合的な形式に結晶化した徴候を示しているとかを指摘することは、啓発するところが多い。

［21］ますます分析的になってきているものと、高度に総合的な形式に結晶化したものがある
●前者の過程は、英語、フランス語、デンマーク語、チベット語、中国語、その他多くの言語について実証できる。後者の過程は、いくつかのアメリカ・インディアン語、たとえばチヌーク語、ナバホ語について証明できると思う。これらの言語の現在の適度に多総合的な形式の下に、ある場合には概略、英語風、他の場合にはチベット語風と称してもよい、分析的な基盤を認めることができる。

◆言語構造の類型◆

［22］同一の種類に属する言語は、多くの細部や構造上の特徴で、互いに平行する傾向を示す

●・・・多数の例において、次のような、すこぶる示唆に富んだ、注目に値する事実を観察することができるのである。すなわち、同一の種類に属する言語は、この分類表では予想されない多くの細部や構造上の特徴において、互いに平行する傾向を示す、という事実だ。たとえば、タケルマ語とギリシア語は、無作為に選んだ二言語としては当然なことだが、地理的には互いに遠く隔たり、歴史的な意味でも類縁関係のない言語であるのに、両者のあいだには、構造の面で非常に興味ある相似点を指摘できるのである。両者の相似性は、この表に記録された一般的な事実以外にも及んでいる。あたかも、互いに独立したものとして考えることも容易にできるし、また理論上、必然的な関係などいっさいないように思われる言語上の諸特徴が、それにもかかわらず、一つの群れをなしたり、両言語の偏流を支配する、ある根深く、統制的な、形式を志向する衝動の跡をともに追跡しようとする傾向があるかのようにさえ思われる。

［23］言語の形式に関する徴候から、根底にある基本図を読みとることができるかもしれない

●したがって、もしも、あたえられた二つの言語が直観でわかるような相似性を有し、両者が同一の無意識的な形式感情を有することを確かめることさえできるならば、両者が共通に、ある言語的な発展を求めたり避けたりしていることを発見したとしても、あまり驚くにはあたらない。われわれは、いまのところ、こういう根本的な形式に関する直観がまさにどのようなものであるか、明確にすることは到底できない。せいぜい、かなり漠然とそれを感じうるにすぎず、おおかたは、その徴候に注目するだけで満足しなければならない。［しかし、］これらの徴候は、多様な言語の記述文法や歴史文法のなかに蓄積されつつある。いつの日か、これらの徴候から、［言語の］根底にある偉大な基本図を読みとることができるかもしれない。

［24］言語は、その構造のもっとも根本的なものを、もっとも長く保存しようとする傾向がある

●・・・諸言語は、絶えず変化の過程をたどっているが、その構造のなかのもっとも根本的なものを、もっとも長く保存しようとする傾向があると推定しても、少しもおかしいことではない。

［25］言語が発達の経路をたどるにつれて、形態的なタイプが徐々に変化しているのに出くわす

●さて、系譜的な関係のある言語の大きなグループ［言いかえれば、文献または比較言語学的な証拠にもとづいて、共通な源から派生したことを明らかにすることができるような諸言語］をとりあげれば、一つの言語から他の言語に移るにつれて、あるいは、それぞれの言語の発達の経路をたどるにつれて、形態的なタイプが徐々に変化しているのに出くわすことが多い。これは、なにも驚くべきことではない。というのは、ある言語が、その当初の形式を永久に忠実に守らなければならない理由は、ひとつもないからだ。

◆言語の時間的変異、すなわち偏流（DRIFT）◆

［26］個人的変異が言語の唯一の変異性であれば、一つの祖語が分裂していくのを説明できない

●もしも、「同一平面上の」（訳注：時間の軸の視点からすれば、ド・ソシュールのいわゆる「共時的」（synchronique）とほぼ同義であると解される。）個人的変異が、唯一の種類の言語の変異性であるとしたら、われわれは、方言が、なぜ、どのようにして生じるのか、また、一つの祖語が徐々に分裂して、相互に理解不可能ないくつかの言語になっていくのは、なぜなのか、きっと説明に窮するだろうと思われる。

［27］言語は空間的な絵でなく、言語には、みずから作った潮流に乗って時間を下る偏流がある

●しかし、言語は、ただ単に空間的に広がっているもの――いわば、個々のひとの心に映っている、まったく同一の、時間のない絵のごときものではない。言語は、みずから作った潮流に乗って時間を下る。言語には偏

流がある。たとえ、一つの言語がいくつかの方言に分裂するようなことがないとしても、たとえ、各言語が堅固な自足的な統一体として持続するとしても、言語は、やはり、割り当てられたいかなる規範からも絶えず離れていって、不断に新しい特徴を発達させ、徐々に、実質的に新しい言語と称してよいほどに、その出発点とは似ても似つかぬ言語に変形されていくことだろう。

［28］言語的均一性が長くは続かないことは、ギリシアの古典時代から今日までの歴史が示す

●・・・古い方言が、折衷形によって均（なら）されるか、文化的に優勢な一つの方言の広まりと影響によって駆逐されるかすると、たちまち、新しい方言があちこちに発生して、過去の水平化の作用を帳消しにしてしまう。たとえば、これこそまさに、ギリシアに起こったことなのだ。古代の古典時代には、非常に多くの地域方言が話されており、そのうちのいくつかは文学のなかで使用されている。アテーナイの文化的優越性が高まるにつれて、その方言であるアッティカ語が他を犠牲にして広まっていき、ついに、マケドニアの征服に続く、いわゆるヘレニズムの時代には、アッティカ方言は、「コイネー」［共通語］として知られる俗化した形式で、ギリシア全土の標準ごとなった。

しかし、この言語的均一性は、長くは続かなかった。今日のギリシア語とその古典時代の原型とを隔てる二千年のあいだに、コイネーは、次第にいくつかの方言に分裂していった。今日、ギリシアは、ホメーロスの時代に劣らず、ことばが豊かに多様化している。もっとも、現在の地域方言は、アッティカ自体の諸方言を除けば、アレクサンドリア時代以前の古い方言の直系の後裔ではない。

［29］方言は絶えず新しい方言に席を譲り、もとの方言は互いに通じない言語に発達していく

●ギリシアの経験は、例外的なものではない。古い方言は、絶えず一掃されて、新しい方言に席を譲りつつある。諸言語は、音声、形態、語彙の非常に多くの点で変化することがあるので、ひとたび、言語社会が崩壊すれば、さまざまな方向に分岐していくのは、驚くにあたらない。［しかし、］地方的に分岐した言語が、厳密な平行線をたどって発達することを期待するのは、行き過ぎだろう。ある地方のことばが、ひとたび、独力で偏流しはじめたならば、もとの仲間のことばからますます遠ざかるのは、ほぼ確かである。さきに触れるところのあった、方言間の相互影響という阻止的な効果がない場合は、概して、方言グループは分岐して、それぞれ、他のすべての方言と異なってくるに決まっている。

時がたつにつれて、それぞれの方言自体も、下位方言に分裂し、下位方言は次第に本物の方言としての品位を帯びるようになる一方、もとからあった方言は、互いに通じない言語に発達していく。こうして発芽過程が続くうちに、ついには、その分岐があまりにも大きくなって、文献上の証拠や、比較または再構の方法で武装した言語学者以外には、だれ一人として、問題の諸言語には系譜的な関係があることを――言いかえれば、遠いむかしの共通の始発点から、それぞれ、別々に発達した経路を表していることを、推測することはできなくなるだろう。

［30］似た点の少ない諸言語が、模糊たる過去の合流点に収束する諸偏流の、現在の終点である

●しかし、近代アイルランド語、英語、イタリア語、ギリシア語、ロシア語、アルメニア語、ペルシア語、ベンガル語のように、あれほど互いに似たところの少ない諸言語が、模糊とした過去の合流点に収束する諸偏流の、現在における終点にすぎないことは、どの歴史的事実にも劣らず確かなことなのだ。この最古の「インド・ヨーロッパ語」（あるいは「アーリア語」）の原型は、部分的には再構できるが、部分的にはぼんやりと推測するほかないのだが、それ自体、太古の方言群のうちの一つの「方言」にすぎない、と信じてはいけない理由は、当然ない。ただ、そうした方言群は、大部分すたれてしまっているか、それとも、あまりにも分岐してしまったために、限られた資料をもってしてはいまや明らかに同族であると認めることはできないような言語で代表されているか、のどちらかである。

◆言語の偏流の方向または「傾斜」◆

［31］言語に起こる歴史的な変化の蓄積がその言語の型を造り換えてしまう、偏流とは何か

●われわれは、ここで、言語の「偏流」という考えに立ちかえらなければならない。もしも、ある言語に起こる歴史的な変化が、つまり、やがては、結果的にその言語の型をそっくり造り換えることになるような微細な修正の膨大な累積が、われわれの周囲のいたるところで目のあたりにする個人的変異と本質的に同一でないとするならば、もしも、こういう［個人的］変異が生じては跡形もなく死滅していくのに対して、偏流を構成する、同様に微細な（またはもっと微細な）変化のほうは、その言語の歴史に永久に印刻されるとするならば、われわれは、この歴史に、ある神秘的な性質を付与しているのではないだろうか。規範を変えようとする個人の無意識的な傾向のほかに、言語にも自力で変化する力があるのだ、と考えているのではないだろうか。もしも、この言語の偏流が、水平に（すなわち、日常経験において）見られたのではなく、垂直の眺望において（すなわち、歴史的に）見られた、おなじみの個人的変異の集合にとどまらないとするならば、それは、いったい、何であろうか。

［32］言語に起こる重要な変化はすべて、最初は個人的変異として存在しなければならない

●言語は、ひとえに、現実に使用されるかぎりで存在する――つまり、話されたり聞かれたり、書かれたり読まれたりするかぎりにおいて存在する。言語に起こる重要な変化はすべて、まず最初は、個人的変異として存在しなければならない。これは、完全に真である。しかし、だからといって、言語の一般的な偏流は、こういう変異のみをあますところなく記述的に研究すれば理解できる、ということには断じてならない。個人的変異そのものは、あてどもなく上げ潮につれて前後にゆらぐ海の波のように、でたらめな現象なのである。

［33］偏流は、特別な方向に累加する個人的変異を話し手が無意識に選択することで形成される

●言語の偏流には、方向性がある。言いかえれば一定の方向に動く個人的変異だけが偏流を具現化する、あるいは、運んでいくのだ。それは、あたかも、入江のなかの一定の波の動きだけが、潮流の輪郭を示すのに似ている。ある言語の偏流は、ある特別な方向に累加する個人的変異を、その言語の話し手が無意識に選択することで形成される。この方向は、おおむね、その言語の過去の歴史から推測することができる。長い目で見れば、偏流の新しい特徴はどれでも、共通の容認されたことばの重要部分になるわけだが、しかし、長いあいだ、少数者の（しかも、軽蔑された少数者の）ことばの単なる傾向として存在することもある。

［34］慣用法の観察からは、言語の「傾斜」や次の数世紀における変化の予示などに気づかない

●われわれが周囲を見まわして、現行の慣用法を観察するとき、言語には「傾斜」があるとか、次の数世紀に起こる諸変化が、ある意味では、現在のいくつかの漠とした傾向のなかに予示されているとか、これらの変化が完了したあかつきには、すでに生じていた変化の継続にすぎないことがわかるだろうとかいうことは、たぶん、頭に浮かんでこないのではないだろうか。

［35］それだけに、変化の方向が最終的に一貫していることに、ひとしお大きな感銘をおぼえる

●むしろ、われわれは、言語はほぼ固定した体系であって、今後どんなにわずかな変化が生じる定めであるにせよ、たぶん、その変化は右の方向にだって、左の方向にだって向うだろう、と感じている。この感じは、誤っている。差し迫った変化の細部については、われわれは、はっきりしたことは何も言えない。それだけに、変化の方向が最終的に一貫していることに、ひとしお大きな感銘をおぼえるのだ。

◆英語における偏流◆

［36］英語のなかで何世紀も働いている、重要性の大きい偏流を、少なくとも三つ識別できる

●・・・英語のなかで働いている、・・・重要性の大きい偏流を、少なくとも三つ識別することができる。これらの偏流は、それぞれ、何世紀にもわたって作動してきたし、それぞれは、英語の機構の他の部分でも働いているし、それぞれは、ほぼ確実に、今後何世紀も、ひょっとすると何千年も持続するのだ。

［37］第一の偏流は、主格と目的格との区別を水平化しようとする周知の傾向である
●第一の偏流は、主格と目的格との区別を水平化しようとする周知の傾向であるが、この傾向自体は、古いインド・ヨーロッパ語の統語的な格組織を着々と縮小していく過程の最近の段階にすぎない。・・・主格と対格との区別は、音声過程と形態の水平化とによって少しずつかみちぎられ、ついには、少数の代名詞のみが、弁別的な主格形と目的格形をとどめるようになった。

［38］第二の偏流は、語の統語関係に決定されて、文中の位置が固定する傾向である
●・・・偏流の第二（は、）・・・語の統語関係に決定されて、文中の位置が固定する傾向である。・・・英語の屈折形式［世話人注：語の文中における文法的な役割や関係の差異を、語形の一部を変えて示す形式］が乏しくなるにつれて、また、統語関係を語自体の形式で表すことがますます不適切になるにつれて、文中の位置が、元来はそれに無縁であった機能を徐々に引き継ぐようになったことを知れば、十分である。・・・

［39］第三の偏流は、不変化詞に向かおうとする偏流である
●・・・大部分の格の区別を廃止しようとする偏流と、それと相関的に、位置をきわめて重要な文法的な方法にしようとする偏流とは、前述した三大偏流の最後のものを伴っている、いや、ある意味では、これに支配されている。それは、不変化詞に向かおうとする偏流である。・・・

◆言語の偏流――音法則◆

［40］あらゆる語・文法要素・言いまわし・音とアクセントは偏流により形成され、形を変える
●・・・あらゆる語、あらゆる文法要素、あらゆる言いまわし、あらゆる音とアクセントは、言語の生命とも言うべき、目に見えない、非個人的な偏流によって形づくられて、ゆっくりと形状を変えていく。

［41］偏流が一貫した方向を指向するという証拠は圧倒的だが、速度は事情に応じて変異する
●この偏流が、ある一貫した方向を指向するという証拠は、圧倒的である。その速度は事情に応じてはなはだしく変異するので、それを規定するのは必ずしも容易ではない。
リトアニア語は、今日でも、紀元前500年から1000年ごろの仮説的なゲルマン母語よりも、インド・ヨーロッパ祖語に近い。ドイツ語は、英語よりもゆっくりと推移しており、ある点では、ほぼ英語とアングロ・サクソン語との中間に位置しているが、他の点では、むしろ、アングロ・サクソン語の路線からそれている。

［42］ゆっくりと偏流して、変更される特徴が、当の言語の精神にとって根本的なものである
●（前の章で）わたしが、方言が形成されたのは、いくつかの地方的切片に分裂した一つの言語が、これらの切片のすべてにおいて、同一の偏流に沿って推移することはできなかったためである、と指摘したのは、もちろん、「完全に同一の」偏流に沿って推移することはできなかった、という意味であった。ある言語の一般的な偏流には、随所に深みがある。水面では、その流れは比較的速やかだ。ある特徴に関しては、方言は急速に偏流して分かれていく。まさにこの事実から、そういう特徴は、もっとゆっくりと変更される特徴ほどは、当の言語の精神にとって根本的なものではないことがわかってくる。一段とゆっくり変更する特徴については、当の諸方言は、相互に異質な言語形式になってしまったずっとあとまで、まとまりを失わないのである。

［43］分裂以前の根本的な偏流の運動量が甚大で分裂後の方言が同一または似た段階を経過する
●しかし、これがすべてではない。方言分裂以前の、もっと根本的な偏流の運動量（モーメンタム）たるや、往々にして大層なものなので、分裂して久しい諸言語が、同一の（またはきわめてよく似た）段階を経過することすらある。［しかも、］そういう多くの場合、方言の相互影響がありえなかったことは、まったく明らかなのだ。

［44］偏流の平行は、形態はもちろん、音声でも作用するし、両者に影響することもある

●このような偏流の平行は、形態の領域はもちろん、音声の領域でも作用することがあるし、同時に両者に影響することもある。興味ある例を一つあげてみよう。foot:feet,mouse:mice で表される英語の複数タイプは、ドイツ語の Fuss:Füsse,Maus:Mäuse と厳密に平行している。・・・

［45］音変化が形態上の配列換えを伴うことを知っているが、その逆はないと想定しがちである

●・・・どの言語学者も、音変化がしばしば形態上の配列換えを伴うことを知ってはいるが、形態のほうは、音の歴史にほとんど影響を及ぼさない、と想定しがちである。わたしは、どちらかと言えば、音声学と文法を相互に無関係な言語学の分野として分離させる現代の傾向は不幸である、と考えている。両者のあいだには、また、それぞれの歴史のあいだには、まだわれわれの十分に把握していないような根本的な関係が存在する公算は大きいのである。

［46］概念領域の強い偏流や恒久的な特徴が音声的な偏流に促進や阻止の影響を与えぬ訳がない

●要するに、言語音が存在するのは、ひとえに、重要な概念や概念グループの記号的な担い手となるためだとしたら、なぜ、概念領域の強い偏流または恒久的な特徴が、音声的な偏流に対して促進的または阻止的な影響を及ぼせないわけがあるだろうか。わたしは、そういう影響は実証できるし、また、従来よりもはるかに細心に研究されてしかるべきである、と信じている。

［47］偏流は、個人的音声変異で、形態上の均衡保持や言語の新しい均衡に役立つものを捉える

●・・・音変化は、ときとして、語や語形式のあいだの心理的な間隔をそのまま保つために、無意識的に促進されることがある。一般的な偏流は、個人的な音声変異のうち、形態上の均衡を保つのに役立つか、または、その言語が目指している新しい均衡をもたらすのに役立つものを、すかさず、とらえるのである。

［48］音変化が少なくとも三つの基本的な縒り（より）糸から構成されていることを提案したい

●そこで、わたしは、音変化が少なくとも三つの基本的な縒り（より）糸から構成されていることを提案したい。

（一）一つの方向に向かう一般的な偏流。その性質についてはほとんど何もわかっていないが、主としてダイナミックな性格（たとえば、強勢の大小、要素の有声音化の大小に向かう傾向）をもっているのではないかと考えられる。

（二）再調整的な傾向。当の言語の根本的な音声パタンを保存または回復することを目指している。

（三）保存的な傾向。これは、あまりにも深刻な形態上の動揺が主要な偏流によって引き起こされるおそれのあるときに始まる。

［49］図式が縒り糸をほぐしたり音声的な偏流を決める複雑な力を十分説明するとは考えていない

●わたしは、これらの縒り糸をほぐすことはつねに可能であるとも、このような純粋に図式的な叙述が、音声的な偏流を左右する複雑な力を十分に説明しているとも、かたときも考えていない。

［50］音声パタンは不変ではないが、パタンを構成する個々の音ほど、たやすくは変化しない

●個別言語の音声パタンは、一定不変ではないが、パタンを構成している個々の音ほどたやすくは、変化しない。パタンに含まれるすべての音声要素は、根本的に変化するかもしれないが、それでも、パタン自体は影響をうけないままである。現代英語のパタンは、古いインド・ヨーロッパ祖語のパタンと同一である、などと主張するのは馬鹿げているだろうが、今日のようにのちの時代でも、英語の語頭子音の系列

k	g	h
t	d	th
p	b	f

は、次のサンスクリット語の系列にひとつひとつ対応していることに注意すれば、深い感銘をうける。

g	gh	k

d　　dh　t
b　　bh　p

［51］音声パタンと根本的な形態的タイプはともに、外面的にはそうは思えない位、保守的である
●音声的パタンと、個々の音との関係は、ある言語の形態的タイプと、その具体的な形態的特徴の一つとのあいだに存在する関係に、ほぼ平行している。音声パタンと根本的な形態的タイプはともに、外面的にはどう見てもそうは思えないにもかかわらず、すこぶる保守的である。どちらが一段と保守的なのか、わからない。両者は、現在のわれわれには十分に理解できないような仕方で、互いに関連しているのではないか、とわたしは考えている。

［52］音声的偏流で生じる音変化の全てが残れば、大半の言語は形態上の不規則さを露呈する
●かりに、音声的偏流によってもたらされた音変化が、すべてそのまま残ることを許されたとすれば、大半の言語は、おそらく、その形式的な基本図との接触がなくなるまでに、形態上の輪郭の不規則さを露呈するだろうと思われる。音変化は、機械的に働く。したがって、音変化は、ある場合には、形態的な１グループ全体に影響を及ぼすことがある――この場合は問題が起こらない。また、ある場合には、形態的な１グループの一部のみに影響を及ぼすことがある――この場合は、混乱が生じることもある。・・・

［53］類推による調整は、関係のある形式群の範囲内だけでなく、遠くまで影響を及ぼす
●類推は、互いに関係のある形式群・・・の範囲内で形式を作り直すだけでなく、その影響をはるか遠くまで及ぼすことがある。たとえば、いくつかの機能的に等価の要素のうちで、ただ一つだけが生き延びて、残りは、その要素の絶えず拡大する影響力に屈してしまうこともある。これこそ、まさに、英語の-S 複数の場合に起こったことだ。-S 複数は、もともと重要な類ではあるにせよ、ある特定の男性名詞に限られていたのが、次第にすべての名詞に対して一般化され、例外は、いまやほとんど消滅しかけている複数タイプをいまだに例証する、ほんのひとにぎりの名詞のみとなった。
（foot:feet, goose:geese, tooth:teeth, mouse:mice, louse:lice, ox:oxen, child:children, sheep:sheep, deer:deer）

［54］類推は音声過程で生じた不規則形を規則化し、確立された体系を混乱させては規則化する
●このように、類推は、音声過程の結果として生じた不規則形を規則的にするばかりではなく、確立されて久しい形式の体系のなかに混乱をも持ちこみ、通例は、この体系をさらに単純化し、規則的にすることに資するのだ。こういう類推による調整は、ほとんどつねに、その言語の一般的な形態的偏流の徴候である。

［55］偏流の一つに付随して生じたｅ複数形は、-S 複数の使用に向かう偏流に押しのけられた
●・・・（英語の foot:feet における）複数形のように、ある音声過程の付随的な結果として現れる形態的な特徴も・・・類推によって容易に広がることがある。・・・ところが、実際には、（複数形の）ｅは、そのように確立されるにはいたらなかった。（foot:feet の）タイプの複数は、ほんのつかのまの足場を得たにすぎなかった。このタイプは、英語の表面的な偏流の一つにさそわれて生じたが、中期英語の時代に、単純明快な形式［-S 複数］の使用に向かう、一段と優勢な偏流によって押しのけられてしまった。・・・

以　　上

==========

（２）各界、各分野の皆様の積極的なご参加をお願いします
既存の領域的な知識をベースにして、新たな領域的な知識を探索し、それらを広域的な知識に組み換

えて、より高次の領域的な知識を仮説形成的に創造することを目標に、アブダクション研究の飛躍を期して参りますので、各界、各分野の皆様の積極的なご参加をお願いします。

（3）アブダクション研究会は、知識の広域化と高次化を目指し進化を続けて参ります
1996 年に設立されたアブダクション研究会は、地球規模の難題に真正面から対処するために、知識の広域化と高次化を目指し、いつまでも、真摯に、勇気を持って、粘り強く、積極的に、可能性を追求し、多様な探究を積み重ねて、一歩一歩進化を続けて参ります。

（4） 発表をしてみたいテーマのご希望があれば、世話人宛に,積極的にお申し出下さい
皆様には、今後に、ぜひとも発表をしてみたいテーマのご希望があれば、世話人宛に積極的にお申し出をいただきたく、お願いを申し上げます。お申し出は、通年的にいつでも、お受け入れを致します。上記の方向に沿うものなら、いかなる領域に属するいかなるテーマであっても、将来の可能性として、誠意を持って相談をさせていただき、実現に向けて調整を果たす所存であります。

記

◇ 日 時： ２０１１年9月２４日（土） １３：００～１７：００（例会）
１７：１５～１９：１５（懇親会）

◇ 場 所： 日本電気企業年金会館 １階会議室 （中山氏のお名前で申し込み）

東京都 世田谷区 代沢５丁目３３－１２ 電話：03-3413-0111（代）

＊ 当日の連絡先（岩下幸功・携帯電話）070-5541-4742

＊ 小田急線／京王・井の頭線 下北沢駅 下車 徒歩約8分

＊ 会場の地図は、グループメールのブリーフケース内「下北沢 NEC 厚生年金基金会館 MAp」に収載。 http://groups.yahoo.co.jp/group/abduction/files/

◇ テーマ：

『脳波研究の歴史とそのセマンテックスを概観する』（仮題）

深 井 寛 修 氏

（立命館大学・情報理工学部）

◆ 文 献 ◆

Saeid Sanei：『EEG Signal Processing』（07・WILEY）

武田常弘著『脳工学』（０３・コロナ社）

＊＊＊

参　考　資　料

脳波（EEG）の解りやすい解説資料をお届けします。

頭皮上には、脳活動を反映した電場が生じる。この電場の時間変化を脳波（electroencephalography；EEG）といい、その頭皮上の空間的分布から脳機能を探索しようとする方法が脳波測定である。非侵襲であり、安静時のほか行動中にもヒトの脳活動を調べることができる利点がある。

原理　：　脳は脳背髄液、硬膜、頭骨、頭皮に覆われており、それぞれ異なる誘電率をもつが、基本的に電気を通す導電体である。したがって脳に何らかの電気活動があれば、頭皮上から記録することができる。脳の電気活動は主にニューロンの細胞内で起こるシナプス後電位と活動電位による膜電位変化である。単一ニューロンの活動電位は細胞外から記録することができるが、頭皮上からはこれを脳波として記録することはできない。なぜなら、電場の大きさは距離の２乗に反比例するからである。たとえば、細胞外記録では活動電位は最大１mV 程度の大きさである。このとき電極はニューロンから１０μm 程度の距離にある。頭皮は大脳皮質から１cm 以上の距離にあるので、誘電率を一定と仮定して１mV の電位は頭皮上では、［1/（１０の１２乗）］V 以下になってしまう（実際は、頭蓋の誘電率は脳の誘電率よりかなり小さいので、さらに小さくなる）。では、脳波はいったいどんな電気活動を反映しているのだろう。単一ニューロンが起こす電場（膜電位の変化）はシナプス後電位も活動電位も１cm も離れるととても記録できない。しかし電場は空間的に足し合わされるという性質がある。今、頭皮上のある一点で電位を測定しているとしよう。その場所には脳のいろいろな場所で起こる膜電位の変化を反映した電位変化が到達している。１つ１つのニューロンが起こし得る電位変化は小さすぎて観測できない。もし観測点からほぼ同じ距離にある 100 万個のニューロンが、同時に膜電位の変化を起こしたとすると、その電位変化は単純に足し合わされて、１つのニューロンが起こす電位変化の 100 万倍の電位変化を起こす。これなら頭皮上からも観測できそうだ。100 万個のニューロンは全く同じ距離にある必要はない。距離の２乗に反比例した電位が足し合わされるだけのことである。つまり遠いところのニューロンでも、その頭皮上の電位変化に距離に応じて貢献し得る。問題は、100 万個ものニューロンがそんなに都合よく同時に膜電位変化を起こしてくれるかどうかだ。これは脳波が実際に測定されているのだから、そのようなことがいつも大脳皮質では起こっているのであろう。しかし活動電位は数 ms 以上も続くのでその電位変化は小さいにもかかわらず時間的には重なりやすいので、脳波の発生に関わると考えられている。

基礎律動　：　脳波、　すなわち頭皮上の電場は、実際には頭皮とそれから離れた場所（左右の耳介を使うことが多い）との電位差として測定する。測定には小さな皿状の金属電極を頭皮に貼り付ける。このとき接着面が安定するように、電解質の入ったペースト状の電極糊を頭皮に塗り、その上に電極を置く。必要に応じていくつかの電極を頭皮の各部位に置いていく。電極を置く位置は、いわゆる 10-20 法に従うことが多いが、近年は 100 個以上の電極があらかじめセットされた帽子状のものを頭部に固定する装置も市販されている。

脳波は安静閉眼時にも観測され、これを基礎律動という。この基礎律動は、主に大脳皮質の活動（特に視床からの入力）に由来する。観測される周波数によって、δ波（～3Hz）、θ波（4～7Hz）、α波（8～13Hz）、β波（14～30Hz）、γ波（31Hz～）という名で呼ばれている。健常者では、後頭部中心に10～11Hz、50μV 程度の大きさ（振幅という）のα波が観測され、ほかの部位は低振幅のβ波が観測される。後頭部のα波は開眼によって一時的に振幅が小さくなることが知られている。また健常人の基礎律動は、覚醒、睡眠によって大きく変化し、これによって睡眠の深さ（睡眠段階）が区別される。よって、覚醒度の判定や睡眠の研究に応用されている。

誘発電位 ： 頭皮上から記録される電位は、基礎律動ばかりではない。たとえば、光などの視覚刺激をするとそれに脳が反応して、ある一定の電位変化を起こす。これを誘発電位（evoked potential；EP）という。しかし一般に誘発電位の振幅は、基礎律動の振幅より小さい。よってこの電位を観測するために、加算平均といわれる方法が用いられる。これは、同じ刺激を 100 回程度数秒ごとに繰り返して、脳波を記録する。この脳波の中に誘発電位が隠れており、その電位変化は刺激呈示時刻からいつも一定の時間後に出現すると考えられる。たとえば視覚誘発電位（visual evoked potential；VEP）では、刺激呈示後約 0.1s に陽性に電位変化が起こる。これが 100 回の反復試行においていつも起きているので、刺激後 0.1s の脳波の振幅を平均すると陽性の電位となる。しかし、誘発電位が出ていなければ、基礎律動の振幅は刺激とは無関係に変動しているので、加算平均をすると電位振幅は０に近い値となる。誘発電位には、視覚以外にも聴覚、触覚に誘発される電位が知られており、それぞれ頭皮上の電位分布や電位の出現時間が異なる。これは、それぞれの知覚を処理する機能局在の違いによる。誘発電位はその刺激の一次感覚野の活動を主に反映している。これらは、種々の脳の病態で変化することが知られているので、その診断や治療効果の判定などに用いられる。脳科学においては、刺激の強さや質による誘発電位の変化から脳機能を探索する実験が多くなされている。また、手指の随意運動（指の関節の伸展など）の数秒前から　徐々に起こる電位変化が前頭部で観測されることが知られており、これを運動準備電位という。この電位は運動に関わる部位（補足運動野、一次運動野）の活動を反映していると考えられている。

遠隔電場電位 ： 基礎律動や誘発電位は主に大脳皮質の活動を反映するが、脳波では脳深部（視床や脳幹）の活動に伴う電位変化を記録することができる。これは、脳磁図にはない特徴である。よく知られているものとしては、聴性脳幹反応がある。これは、聴覚刺激（短時間の音）に反応した脳幹の聴覚伝導路の各部位からの電位変化を測定するものである。非常に振幅が小さいので、1000 回程度の加算平均が必要である。聴覚障害の診断や、脳死判定にも使用されている。

事象関連電位 ： 外部刺激に惹起されて出現する誘発電位が外因性電位といわれるのに対して、事象関連電位（event –related potential；ERP）は刺激そのものではなく被験者に与えられた精神作業のような高次脳機能を反映する内因性の電位も含んだ概念である。種々のものが知られているが、最もよく利用されているのは、P3 または P300 と呼ばれるものである。弁別可能な 2 種類の刺激（高音と低音など）をランダムに呈示し、呈示回数の少ないほうの刺激を数えるか、ボタン押しをさせる。低頻度刺激後約 300ms に陽性（positive）の電位が Pz 中心に出現するので、この名（P300）が命名された。この電位の意味としては、課題の設定により、意思決定、刺激の評価、情報刷新などと解釈されている。成人では潜時が年齢とともに延長する傾向がある。この電位を応用して、声や手足の運動で意思疎通ができない患者が意思を伝える方法が開発されている。たとえば、単語や五十音を視覚的に呈示して、P300 が誘発された文字を拾いとって、意思を読み取る。いわゆるブレインーマシンインタフェースのひとつである。

『脳波』の概念と意義に関し解りやすくて包括的な解説をしている文献を探していたのですが、村上郁也編『イラストレクチャー認知神経科学』（2010・オーム社）に、上記のような行き届いた解説の例を見付けました。
第８０回アブダクション研究会では、深井寛修氏の発表がありますので、この資料を事前に繰り返して読み込んで置かれますと、その理解が一段と進むかも知れません。
アブダクション研究会　世話人　福　永　征　夫

＊＊

◇プログラム：

（1）諸連絡：　　１３：００～１３：１０

（2）研究発表：　　［ PART－Ⅰ ］　　１３：１０～１４：２５

＜小休止＞　　１４：２５～１４：３０

［　PART－Ⅱ　］　　１４：３０～１５：４５

＜小休止＞　　１５：４５～１５：５０

（３）総合的な質疑応答：　　１５：５０～１６：５０

（４）諸連絡：　　１６：５０～１７：００

（５）懇親会：＜皆様の積極的なご参加を期待しています＞　　１７：１５～１９：１５

＊＊＊

◆第８０回アブダクション研究会の懇親会で、「企業文化と経営思想の潮流」を考える分科会の発足趣意書を説明し、皆様の了承を得て、新分科会をスタートさせたいと存じています。

◆広くて深い探求が求められ、重要で責任のあるテーマを担う分科会になります。

◆皆様の積極的なご参加を期待しています。

＊　＊＊

＊

第８０回 アブダクション研究会（９／２４）の出欠連絡

●９／１９（月）までの返信にご協力下さい。ご連絡なしの当日出席も無論可ですが、会場や資料の準備の都合もありますので、できるだけ、ご協力くださるようお願いします。

FAX：　042-356-3810
E-mail：　abduction-owner@yahoogroups.jp　　岩下　幸功　行

●９／２４（土）の　研究会に、未定ですが　出　席 / 調　整 / 欠　席　します。

●懇親会に、未定ですが　出　席 / 調　整 / 欠　席　します。

ご署名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

☆　出欠の連絡は、グループメールメニューの「投票」コーナーから行うこともできます。
http://groups.yahoo.co.jp/group/abduction/polls

＊ 次々回２０１１年１１月度の第８１回アブダクション研究会は、２０１１年１１月２６日（土）にＮＥＣ企業年金会館・１階会議室で、開催します。

＊ １１月度の研究会は、小島　保彦　氏（インターフェロン・ハーブ研究所）に『インターフェロン研究の経緯とアブダクション』（仮題）のテーマで、ご発表をいただきます。

＊ 参考文献は、早めにお知らせするようにします。

＊ 大いにご期待をいただき、奮ってご参加ください。

＜定例アンケート調査＞

もしご協力がいただければ、という趣旨であり、必須ではありません。
皆様のメッセージ集として他の会員にも伝達しますので、情報の交流に積極的に参画下さい。

⑴ 今、アブダクションの研究・実践と関連のある事項で特に興味をもって取り組んでおられること。
⑵ 研究会の議論の場を通して INTERSECTIONAL なアイデアや知見の INCUBATION が進んでおり、例会で発表したいと思っておられること。
⑶ これまで（第１回～第７９回）の研究発表やなされた議論（「議事録」を参照下さい）に関して、さらに改めて質疑や意見を表明したいと考えておられること
⑷ アブダクションの観点から、注目すべき人・研究グループ・著書（古今東西不問）。
⑸ 細分化された「知」の再構築を図るという視点から、注目すべき人・研究グループ・著書（古今東西不問）。
⑹ 貴方ご自身がお考えになられている「知」の定義とは？
⑺ その他のご意見、ご要望、連絡事項など。
特に他学会・研究会での発表内容や発表論文等についても是非お知らせ下さい。

……
……
……
……
……
……